

一 般 演 題 抄 録

## 18. 下顎枝における下歯槽管の臨床解剖学的研究

植村 富美子 塚原 孝治 黒住 望  
清水 隆司 上石 弘  
近畿大学医学部附属病院形成外科

近年顎顔面外科の発達はめざましいものがある。従来の顎顔面の奇型や高度な変形に対する修復再建は、表面の軟部組織のみの手術にとどまっていたため、その効果には限界があった。しかし、これらに対して、大胆に骨に対する手術が行われるようになり、劇的な改善や著明な効果が得られるようになった。主として咬合を改善するための下顎矢状分割術は頻用される術式である。これは、1955年 Obwegser により発表されたもので、両側の下顎上行枝を矢状分割することで、下顎を前後方向に移動させることができる。この発表以来、骨切り線の改良や術後合併症についての報告は散見されるがしかし、神経血管束を含む 10 mm にもみたくない下顎上行枝をスライスするこの手術を、いかに安全に行うかについては検討されていない。そこで我々は、下顎上行枝における下顎孔について臨床的解剖を詳細に検討した。

### 方 法

当大学解剖学教室所有のインド人と思われる乾燥下顎骨100個について、マルチン人類学に従って各設定点を決め、下顎孔に関する距離を求めた。さらに同下顎骨のオルソパントモグラフを撮影した。レントゲン上の下顎孔に関する距離を計測し、実測との相関関係を求めた。

### 結 果

実測での下顎切痕一下顎孔距離とレントゲン上での関節突起一下顎孔距離との間に、相関を認め、その関係式は、 $Y=8.1+0.34X$  であった。また、実測での、下顎切痕一下顎孔距離と、レントゲン上での筋突起一下顎孔距離との間にも相関を認め、その関係式は、 $Y=8.2+0.39X$  であった。

### 考 察

求められた関係式から下顎孔の存在する位置が、術前に推測することが可能であると同時に、逆に、下顎孔が、約 8 mm 以上下顎切痕からの距離を経て存在しないとも言える。

このことで、約 8 mm 以上離れた位置に、骨切り線を求めることによって、この矢状分割術は、容易にしかも安全に行えると言える。我々は、術中に切痕からの距離を計測するための器具を作製し利用している。

### ま と め

下顎孔の解剖学的位置を再検討すべく、下顎骨の実測とし線計測を行いある相関関係を認め、術前に実際の下顎孔位置を予測するための指標を持ち得た。すなわち、従来から、頻用されるが難位度の高い手術を、容易に、しかも安全にとりくめるものとした。